

**産学連携による実践型人材育成事業  
－専門人材の基盤的教育推進プログラム－  
申請書（様式）**

プロジェクト名称：

エアークラシメイクアップの有用性の実証と方法論の確立と人材育成プログラムの開発

■申請区分(該当区分を枠で囲む。)

A:生産・ものづくり系    B:ICT系    C:医療・福祉系

D:その他

(サービス系、ファッション・デザイン系、  
ビジネス系、その他)

■代表校

\*法人名：東京安達学園

\*理事長名：安達 暁子

\*学校名：学校法人 専門学校 東京ビジュアルアーツ

\*校長名：橋本 邦比兒

\*所在地：(郵便番号：102-0081)  
東京都千代田区四番町 11

\*プロジェクト責任者

職 名：学務部 次長 メイク学科 学科長

氏 名：白岩 直明

電話番号：03-3221-0206

メールアドレス：shiraiwa@tva.ac.jp

\*事務担当者

所属部局：学務部 メイク学科

職 名：事務係

氏 名：菅野 文子

電話番号：03-3221-0206

FAX番号：03-3221-0243

メールアドレス：fumiko@tva.ac.jp

代表校名：専門学校 東京ビジュアルアーツ

## 1 実施委員会等の構成員・構成機関

○実施委員会			
氏名	所属・職名	役割等	都道府県名
白岩 直明	専門学校東京ビジュアルアーツ学 務部次長 メイク学科 学科長	委員長	東京都
浅野 覚仁	専門学校東京ビジュアルアーツ メイク学科 講師	副委員長・調査	東京都
奥山 一成	山野美容専門学校 美容福祉講習 講師	協議委員	東京都
北野 幸子	ハリウッド美容専門学校 メイク 科 高度専門課程 教員	協議委員・調査	東京都
井上 和彦	早稲田美容専門学校 副校長	協議委員・調査	東京都
板橋 晃子	群馬県美容専門学校 トータルビ ューティ科 教員	協議委員・調査	群馬県
川添 雅英	ECCアーティスト専門学校メイ クアップアーティストコース教務	協議委員	大阪府
大島 耐之	金城学院大学薬学部 教授	協議委員・薬事関 係審査評価	愛知県
浅野 輝幸	(資) マリブ 代表	協議委員・調査	愛知県
○実施協力機関等			
団体名、機関名等	役割等	都道府県名	
専門学校東京ビジュアルアーツ	プログラム開発、実証講座	東京都	
山野美容専門学校	プログラム開発、実証講座	東京都	
ハリウッド美容専門学校	プログラム開発、実証講座	東京都	
早稲田美容専門学校	プログラム開発、実証講座	東京都	
群馬県美容専門学校	プログラム開発、実証講座	群馬県	
ECCアーティスト専門学校	プログラム開発、実証講座	大阪府	
金城学院大学薬学部	有用性評価・調査分析協力	愛知県	
名古屋大学医学部保健学科	有用性評価・調査分析協力	愛知県	
山野芸術短期大学	有用性評価・調査協力	東京都	
富山県理容美容専門学校	有用性評価・調査協力	富山県	
国際デザイン・ビューティカレッジ	有用性評価・調査協力	高知県	
東京マックス美容専門学校	有用性評価・調査協力	東京都	
四季株式会社（劇団四季）	実態調査協力・メイク	東京都	
アトリエISM株式会社	実態調査協力・メイク	東京都	

アトリエ レザン	実態調査協力・メイク	東京都
TEMPTU	実態調査協力・メイク	東京都
株式会社百武スタジオ	実態調査協力・メイク	東京都
株式会社 MEU	実態調査協力・メイク	東京都
有限会社ドリームファクトリー	実態調査協力・メイク	和歌山県
嶺美会	実態調査協力・ブライダル	長野県
株式会社エスピーール	実態調査協力・ブライダル	愛知県
NPO全国介護美容福祉協会	実態調査協力・美容福祉	東京都
ココスタジオ	実態調査協力・死化粧	東京都

## 2 プロジェクトの内容等

### (1)プロジェクトの概要(200字以内)

より繊細で高度なメイクアップはエアブラシなくしてはできないが、日本におけるエアブラシメイクは未熟である。本プロジェクトはエアブラシメイクの有用性を実証し、その方法論を早期に統合、確立した上で、人材育成プログラムの開発を行う。この基礎理論と育成プログラムの開発は映像と画像のHD化への早急な対応のために必須であり、F/X、カバー、福祉介護美容、コメディカル分野への応用のための基礎をなす。

### (2)プロジェクトの内容について(具体的な取組の内容。例えば、教育プログラムの開発、評価、教員の資質向上 等)

エアブラシの利点である、薄膜、発色、均一性は従来のハンドタッチのメイクでは実践できない表現を可能にする。すでに始まった米国でのTVや映画のHD（ハイデフ：ハイビジョンはNHKの商標登録）への移行はエアブラシメイクでしか対応できないことを示唆した。映像のHD化へのメイクアップの対応は、より繊細で高度なメイクアップであるエアブラシなくしてはできない。また、CG（コンピュータ グラフィックス）化はコストパフォーマンスが悪く、F/X（特殊）メイクが見直されている。F/X（特殊）メイクにおいても、エアブラシメイクアップは必須な技術である。このような映像や画像のHD化や需要に対し、メイクアップの対応が必要である。エアブラシメイクの応用範囲はすこぶる広い。日本ではエアブラシメイクは未熟なもので、使用する材料の区別もできていない。ビューティメイクからアグリメイクさらにはF/X（特殊）メイクまで幅広く対応することが、本来のメイクアップと位置付けられ、現場では多様な要求がメイクアップアーティストに求められている。しかし、多くのメイクアップアーティストは従来のハンドタッチの化粧しかできず、多様化する要求には応じられない。エアブラシメイクアップの方法の統合、確立はこのような多様化した要求に対応することができ、応用することができる。さらに、エアブラシメイクはコメディカルの分野でも注目されている。痣やタトゥなどを隠すカバーメイク（リハビリメイクは有かづきれいこの商標登録）はエアブラシなくしては困難である。福祉介護においては、エアブラシメイクのノンタッチと薄膜による肌への負担の軽減が福祉介護美容に取り入れられ、基礎技術としてのエアブラシメイクアップの確立を必要としている。また、人生の終末の化粧としての死化粧なども、エアブラシのノンタッチゆえに衛生面からもその利用が求められている。すでに、一部分野ではエアブラシを導入しており、特にビューティメイクではHD対応やブライダル対応、カバーメイクなどが実需として要請が多い。また、ボディアートやF/Xの分野においても、エアブラシでより繊細な表現が要求されてきている。美容福祉（美容福祉は山野学苑の商標登録）においてはフェイスだけでなくヘアダイ（薬品によるストレスが多い）にかわるものとして応用されている。従来のハンドタッチメイクの分野だけでなく、ハンドタッチでは考えられない分野で使用され、求められている。本プロジェクトの目的の一つである、エアブラシメイクアップの有用性の実証とメイク方法の統合、確立は基礎理論となるものであり、その確立が急務である。早期に百者百様の方法を統合

し、その方法論を確立し、人材育成プログラムを開発し、適用しなければならない。エアブラシメイクの有用性は、ハンドタッチにできない仕上げ（芸術的表現はもとより物理的な機能からの見栄えも含む）にある。また、ハンドタッチ以上に、肌に負担をかけずにメイクできる点にある。実際のメイク後をマイクロスコープで見ればよくわかる。さらに、ノンタッチとインクの多様性は、多くの分野での需要を顕在化してきている。現時点では一部の者しかエアブラシメイクの良さが認識されておらず、第一に、多くの者にエアブラシメイクアップの有用性を周知することから始めなければならない。第二に、エアブラシメイクの方法の統合と確立が必要である。メイク理論（コンシール、ベース、カントア、ブラシュ、チーク、ブロウ、ハイライト、シャドウ、リップ、修正、ヘア、カバーメイクなど）は従来のハンドタッチとなんら変わることはない。しかし、材料や溶剤ベースが異なり、それらを理解して使用することが必要である。これらの一連のメイク理論を再構築し、エアブラシメイクアップの方法を早期に確立する必要がある。最後に、上記の完成された方法論と有用性の理論的根拠を経て、人材育成のプログラムを開発し、参加校において適用し、検証し、修正を行う。完成した人材育成プログラムの適用によって、早急に高度な資質を持つメイクアップアーティストを育成することができる。また、プロジェクト終了期において、教員向けに人材育成プログラムの運営のための集中講義を行い、より早急な普及を目指す。

### **(3)プロジェクトの目標等について**

#### **①当該分野における人材ニーズ等の状況、その中でのプロジェクト実施の意義**

日本において、メイクアップとしてエアブラシを使いこなせるアーティストは少ない。学習においては、多くは米国において理論、技術を習得しているのが現状である。本プロジェクトはエアブラシメイクアップの地位の確立を目指すものであり、日本の法的規制や材料の物理化学的な肌への作用を理解し、技術論を中心として展開し、高度な資質を持つ人材育成を目指す。特にすべての基礎となるビューティメイクアップにおいて、その技術的方法論の統合、確立と人材育成プログラムはすでに開講している数校の参加校のコンセンサスより開発されるため、即効力のあるプログラムとなる。現在は非常に教員不足であることは否めない。したがって、本プロジェクトのエアブラシの方法論と人材育成プログラムの完成を通して、今後の教員不足を急速に補うことができる。さらに、エアブラシメイクの習得は、その応用範囲が広く、本来あるべきメイクアップアーティストの技術面での能力の向上に寄与し、しいてはメイクアップアーティストの地位の確立に資することができる。すなわち、ビューティーからアグリー、F/X、コメディカルまで多様化する要求に対しメイクアップアーティストの範囲が広がり、社会的な地位の確立を目指すものである。すでに、実需においては映画やテレビなどのHD対応、ブライダル、福祉介護理容、看護、介護、タトゥカバー、死化粧など民間において運営されており、エアブラシメイクは需要の多様化に対応できると認められており、人材不足の解消とより高度な体系的教育が求められている。他方、従来のハンドタッチはエアブラシメイクの補完的方法にすぎないことが認識されるであろう。この意味において、メイクアップは革命的に変遷しているのであり、科学的、体系的な人材育成プログラムが必要とされている。

#### **②上記(2)の取組が求められている状況、本プロジェクトにより推進する必要性**

エアブラシメイクアップの技術面の方法論の確立は急務である。日本の現状ではメイク

アップとしてエアブラシを取り入れ、教授している学校は数校にすぎない。一方、米国のエアブラシメイクブームに乗り、日本でも簡単なエアブラシメイクアップ商品が発売されているが、その方法論や、材料理論がないために、多くのメイクアップアーティストはエアブラシメイクの良さを認識、実感できずに、従来のハンドタッチメイクに戻ってしまっている。我々はこのことに特に懸念を抱く。

エアブラシメイク本来の利点を広く周知し、実際の米国、EUでの使用状況を知れば、エアブラシメイクアップの必要性は認識される。ある米国の音楽アーティストはエアブラシでしかメイクしない。彼らが日本で講演する時、エアブラシメイクができる者を探す必要が生じたこともある。ロケ用のメイクバスなどには標準設備としてエアブラシ用の噴出し口が各テーブル毎についている。また、カバーメイクは大変需要のある分野である。ブライダルや身体検査などでの需要は特に多い。福祉美容もまた大変需要が多く、エアブラシの基礎なくしてはすることができない。現場においてエアブラシを使いこなし、メイクできる人材は少なく、対応できていないのが現状である。すでに欧米ではエアブラシが二大方法論として教授されているのに対し、日本ではエアブラシは全く意識されていない。日本のアーティストは世界では通用しない一因である。このような背景のなかで、エアブラシの有用性の認識と方法論の統合、確立と育成プログラムの開発が急がれる。本プロジェクトの目指すエアブラシメイクの方法論の統合、確立はこのような実需にすぐに応用することができ、即時的効果が期待できる。また、体系的に学習できるプログラムの開発がグローバルスタンダードへの到達の最短、最速の方法である。

### ③プロジェクト実施により期待する成果、目標

エアブラシメイクの方法論の確立によって、ハンドタッチとエアブラシがメイクアップの2大方法論であることが周知されるであろう。エアブラシメイクの方法論の統合、確立は人材育成プログラム開発を簡単にし、プログラムの適用は、基礎レベルの習得を円滑に達成させることができる。さらに、高度な応用技術への基礎理論となることによって、応用範囲が広がる。世界的趨勢であるハンドタッチからエアブラシメイクアップへのシフトが、グローバルな変遷と共に移行することは最も重要なことであり、本件プログラムの開発と適用は早急な日本のメイクアップの地位の向上に資することができる。実際、米国、EU、ブラジル、韓国、香港などではエアブラシメイクアップへシフトし多くの作品が発表されてきている。日本では試験的な使用が見受けられるが作品としての発表は極端に少ない。多くのものが確立した方法論を学び、より分かりやすいプログラムを学習することによって、多くのアーティストの育成が促進される。

本件プロジェクトの最終目標は有用性の認識と人材育成プログラムの開発であり、多くのものがエアブラシメイクの有用性を理解し応用できれば、多くの革新的需要を顕在化させる。本来、我々が目的とするものはメイクアップの地位の向上と、社会的貢献にある。エアブラシメイクの確立は技術の一面にすぎないが、エアブラシメイクの確立によって、従来のハンドタッチと共に、技術面においては、ほぼ完成されることになる。応用範囲の広いエアブラシメイクアップはアーティストの活動範囲を広げ、多様化する要求に対応することができる。さらにより高度なメイクアップを確立するにはアカデミックな理論面の知識習得を経て確立され、メイクアップ側からの材料選択をして、安全、安心が担保されなければならない。この意味においても、早急にエアブラシメイクアップの技術

面の確立をし、育成プログラムを開発、適用し、次の段階への移行が切望される。

#### (4)プロジェクトの実施計画について(連携体制、工程、普及方策 等)

① エアーブラシメイクアップは設備的に大掛かりなものはないが、エアーブラシコンプレッサーとハンドピースは必需品である。現在、学校では、予算の制約もあり、コンプレッサーは大きなものを数個に分岐し使用しているが、メイクアップには低圧のもので十分であり、現場においても、個人用の小さなものを使用するため、本件プロジェクトにおいても、個人用の機器をベースとし、機械は現場様で実践しながら技術習得することが必要である。1人1台を標準とすることが望ましい。

② 参加校(プログラム開発、実証講座を行う学校)において、エアーブラシメイクのアーティストによる特別講義やデモンストレーションを行い、実際に体験することによって、エアーブラシメイクの評価を行ってもら。原則参加校は行うこととする。なお、参加校においても他コースにて要請がある場合は別途行う。

③ エアーブラシメイクアップの方法論を早期に確立し、参加校において適用する。機械の操作習得やエアーブラシの基礎(点、円、球などの描画)の習得に2カ月ほどかかり、その間に実施委員会において方法論を統合、確立する。すでに、参加校は講義科目としてエアーブラシメイクを取り入れているので、今までの方法論を見直し、再編成することによって、早期に方法論の確立を目指す。コンシール、ベース、カントア、ブラッシュ、チーク、ブロウ、アイライン、アイシャドウ、ハイライト、リップ、修正などをエアーブラシ用に再構築する。さらに、ヘアー、カバーメイクなどの実需対応も行う。

④ 方法論の確立と同時に、育成プログラム原案を作成し、参加校において実施し、検証、修正する。ステップ毎の時間配分や効率的な演習方法などをまとめ上げ育成プログラムを完成させる。

⑤ 海外のメイクアップの動向を知る必要があり、欧米におけるメイクアップショウなどの視察および現地トップアーティストによる研修を行う。また、米国等で活躍しているトップアーティストを招へいし、講演する。

⑥ エアーブラシメイクに興味を持つ学校や生徒は多い。しかし、直接触れたり、知ったりする機会がすくない。特に地方においては、エアーブラシすら知らないのが現状である。本プロジェクトは参加校だけでなく、プロジェクト承認後も協力校(有用性評価・調査協力校)や不参加校にも周知するものとし、要請があれば特別講義やデモンストレーションを行い、反応評価を試みる。協力校は、現段階でエアーブラシメイクアップの必要性を認識しており、教員不足のために開講できない学校である。これら協力校はすでに、特別講義やデモンストレーションを希望している。リストにはないが系列校や教員不足のために今回不参加の学校も特別講義やデモンストレーションを希望している(30校程度)。また、不参加校に対して周知し、応募してもら。産業界の協力を経て30校程度をこなす。

⑦ 産業界の協力を得て、実需などの、ブライダルやタトゥカバメイクの現場を視察し、実際の使用例を確認し、アンケート調査を行い、意見集約を行う。なお、大規模組織会社においては、協力の承諾を得ているものの、エアーブラシメイクを試験的、未公開プロジェクトとしている会社が多く、匿名を希望する会社が多い。

⑧ 開発の過程とコンセンサスを逐次、情報公開することによって、本件プロジェクトの周知と育成プログラムの普及をはかる。インターネットで公開する。

⑨ 終盤期に開講の必要性を認識する学校の教員を対象に育成プログラムの実施と運用の集中講義を行い、次年度での開講校の増加を目指す。

#### (5)プロジェクトの評価について

##### ①評価の体制・手法

有用性の評価：科学的評価（薄膜、発色、均一等）とともに、エアーブラシのメイクでの使用後の比較調査を行い、見栄え、耐久性、化粧のり、使用感、コストパフォーマンスなどの評価軸を数値化し、エアーブラシメイクの特徴を検証する。

特別講義やデモンストレーション実施校において、学生によるエアーブラシメイクアップの評価調査により有用性を評価分析する。

エアーブラシメイクアップの方法論の確立：エアーブラシの方法論を早期に確立し、授業に取り入れ、学生の反応を観察し修正を施す。エスキースした、標準メイクに方法論を適用し、適用後の評価軸（時間、見栄え、再生度、その他）を数値化し、評価する。協力会社に手引書を配布し、評価調査を行う。

人材育成プログラムの開発：エアーブラシメイクは、エアーブラシの手法（吹き方）やメイクアップ方法論だけでなく、機械のメンテナンスや清掃を含む。手法においては多くの練習が必要である。一連の授業を通じて最適な時間配分を模索し、より効率的な人材育成プログラムを開発し、評価する。プログラム運用の集中講座を通し、評価調査を行う。

##### ②目標達成度合いの測定指標

エアーブラシの有用性の評価：特別講義やデモンストレーションを行いたい学校の応募数によって興味度が測られ、その実行を通じエアーブラシメイクの有用性評価がなされる。しかし、本来の科学的な有用性の評価（薄膜、発色、均一等）は実証され、その周知を目的とするために、アンケートによる有用性の理解の確認を行い、集計分析する。

エアーブラシのメイクの方法論の確立：すでに数校での取り組みを前提としているため、実際の方法論の手順を冊子化し、手引書として完成させる。

育成プログラムの開発：実施校、協力校、デモ実施校の教員に対し開発した育成プログラムを配布し、プログラム実施および運用集中講義を行い、アンケートによるプログラムの評価調査を行う。また運用集中講義への応募数によりプログラムの重要性が確認できる。

#### (6)プロジェクト終了後の方針について(継続性、発展性 等)

教員への人材育成プログラムの集中講義を通じて次年度および次年度以降のエアーブラシメイクアップの開講へのバックアップを行う。教員の技術習得とともに、人材育成プログラムの運用集中講義はエアーブラシメイクの開講や一部採用等の多くの波及効果が期待できる。本プロジェクト自体は、実需分野やアートへの応用論の構築が必要である。さらに、材料が多様化する中、使用における安全、安心の確保が最も重要な課題となる。メイクアップ材料は外国製のものが多く、法的制度を踏まえた製品開発や国産品の開発には本プロジェクトの人材の育成を通じたアーティストのフィードバックが必要である。米国においては、メイクアップアーティストはMSDS(Material safety Data sheet:製品安全データシート)を理解し使用すべきものとされている。日本ではこの意識はない。今後は技術面だけでなく、MSDSの理解などのアカデミックな知識の習得を含める必要がある。技術検定制度の構築と国家資格（薬事法上の化粧品総括製造販売責任者）の取得要件を満たす理論面をカバーし、技術と理論を踏まえた、メイクアップアーティストの育成が課題となる。